

市民がグループ化して農業

「コミュニティガーデン」が日本でも、じわりと拡がりつつある。これはアメリカが発祥で、ビルが建て替え等で一時、更地となったところに、市民が花や野菜を植えて菜園として利用するものだ。

これが日本では担い手のいなくなってしまう都市農地を、市民が借用し、市民でグループを作って活用する形で拡がる。まさに市民による「協働農場」である。

日本農業は担い手不足が深刻であるが、都市農業でも状況は同様だ。その都市には農業を眺めているだけではなく、自分でやってみたいという市民も多い。グループで、作業を分担し、分らないところは農家に教えてもらう。市街化区域に農地が残る、世界でも稀な条件を活かしての協働農場だ。体験農園等も含めて、都市農業の担い手は多様化が進行している。

いじもにぎわう「せせらぎ農園」

ネットで検索してみると東京を

はじめとして、いくつものコミュニティガーデンや「循環型コミュニティガーデン協会」もヒットする。そうした中で筆者が頻繁に交流・連絡を取り合っているのが日野市の「せせらぎ農園」である。そもそもは2004年に立ち上げ

「せせらぎ農園」を開設したものである。着実に活動を積み上げ、直近での会員数は約37名。火、木、日曜の週3回の午前が作業日で、直近での年間作業参加者数は2233名というから驚きだ。いつもたくさ

意欲も旺盛である。 たくさんの市民の農への参画

挑戦の最大のねらいは、日野市内でのコミュニティガーデンを増やし、たくさんの市民が農に参画するところにある。日野市独自のまちづくり条例を活用して、18年には農家や多様な市民26名が集まり「農のある暮らしづくり協議会」を発足。その事務局を法人化して「一般社団法人TUKURU」を立ち上げ、市民、農家、行政、企業など、多様な関係者の間に立ち、それらの連携・協働をコーディネートしている。現在では、せせらぎ農園は「まちの生ごみ活かし隊」が運営し、TUKURUが管理するかたちをとる。またこのTUKURUが「うちたすポタジェ」「南平交流公園」等の運営を行政から事業受託するなど、コミュニティガーデンを増加させていく推進力となっている。

市民の農業参画が、協働農場から援農、さらには農村還流にまで広がっていくことを期待したい。



た、各家庭から出る生ごみをたい肥化する「まちの生ごみ活かし隊」が母体であるが、生ごみを持ち込んでいたたい肥化施設が閉鎖となったことをきっかけに、08年に農地の一部を利用して援農という形で、「資源循環型農園」「せせ

らぎ農園」を開設したものである。着実に活動を積み上げ、直近での会員数は約37名。火、木、日曜の週3回の午前が作業日で、直近での年間作業参加者数は2233名というから驚きだ。いつもたくさ